

<平成28年度日本語学校教育研究大会趣旨>

大会テーマ『新しい日本語学校教育の質のかたち ―これからの教員を考える―』

大会委員長 田中眞一
(大阪 YMCA 国際専門学校/大阪 YMCA 学院)

この数年で日本語学校をめぐる教育環境、運営環境は大きな変化を遂げました。在籍学習者の国構成の変化、いわゆる非漢字圏の国からの学習者の増加、日本語学習目的の多様化、ITC技術の発達による母国での日本語学習環境の変化、自己点検・自己評価実施の義務化等、4, 5年前までは変化の兆候といわれていたことが、今までは目の前の現実となっています。

日本語学校教育研究大会ではこれらの変化をテーマに取り上げ、日本語学校の社会における役割と将来のあるべき姿を追及してきました。昨年度はテーマを『日本語学校 8万人のビジョンを考える III ～新しい日本語学校教育の質のかたち～』とし、急増する日本語学校と在籍学生に対応する新しい日本語学校教育について考えました。

本年度は、昨年度のテーマの副題であった『～新しい日本語学校教育の質のかたち～』をメインテーマとし、「教員」を切り口として日本語学校教育の「新しい質のかたち」を考えてみたいと思います。基調講演では「日本語教師はもういない？」のか、続くパネルセッションでは「日本語教師の質・量を考える」と題し、これからの日本語教師のありようについて考えます。また、日本語教育を学ぶ大学生・院生と日本語学校教員の意見交換の機会を持ち、「日本語学校に就職する？」について話します。

大きな変化は日本語学校の教育面だけではなく、運営面でも起きています。「日本語学校の自己点検、自己評価」は、日本語学校の運営・教育の質の向上のためにも重要な活動で、日本語教育振興協会を中心に取り組んできましたが、学校現場では十分に実施、活用されていませんでした。しかし、新告示基準ではその実施が義務化されます。「自己点検、自己評価」を活用し、「新しい質のかたち」を探る必要があります。

大きな変化が現実となった今、私たちの教育活動の今後の方向性を一緒に考えたいと思います。